

原始佛教に於ける禪定の研究

增

永

靈

鳳

佛教に於ける禪定の起原は佛陀が嘗て苦行を俱にしたる橘陳如 (kouḍāñña) 以下の五比丘に對して 説ける八正道の最後の一章に見出すことが出来る。従つて八正道を説ける最も古き文献は固より初轉法輪經 Dhamma cakkhappava-
 ttana suttam (巴利文) Dharmacakrapavartana sūtra (梵文) chos-kyi lhkor-lo Rab-tu-bskor-bahim Do (西
 藏文) である。この經典が盛る思想内容に關しては別に批判を要するけれども、佛陀が初轉法輪の際八正道を説いたと
 いふことだけは其の前後の事情乃至經典構成の次第によつて明白である。蓋し佛陀が成道後鹿野苑へ赴くに先だつて五
 群の比丘が大品 mahāvagga (pp. 8—) や聖求經 Ariyapariyesana sutta (M.N.vol.I p.171) 等に記せる非禮の約束をなさなかつたとしても、彼等に對して佛陀は自ら苦を解脱し所謂覺者となれる事實を明かし、更にその境地に到達するには如何なる方法が用ひられ又用ひらるべきかを當然示さなければならぬからである。初轉法輪經には其の初八正道を説く時にも亦四聖諦を示す場合にも八正道自身の意義内容を示してゐない。併し只名目を提示するのみでは斯る全く新しき實踐の道が彼等に理解せらるゝ筈がない。従つて經典そのものには縱令示されてゐないにしても、その場合心ゆくまで精細に説かれたものと見るべきである。次に我々は八正道の終りに正智、正解脱を擧げ、又は正解脱、正智の二支を加へてゐる文献をも見出し得る。此の二支を加上することによつて、又は二支順序の如何によつて聊か異なる解釋をも許されるであらうが今は暫く割愛する。却説八正道に於ける各支が相互に有機的關係を持つべきは勿論であ

るけれども、その系列には重点を異にする二つの見方が看取せらるゝ。一は正見(Sammā-dīṭṭhi)を主とし、それ以

※⁵

下の七支は正見が實現されて行く道と考へられてゐる。他は正定(sammā-samādhi)に重きを置き前來の七支は其れへ
の助縁(upanisa)資料(parikkhāra)であると見られてゐる。前者の考へ方よりすれば正定はそれ自身獨立の意味を
持たない。後者の見方よりすれば正定は啻に獨自の意味を持つのみならず、七支を統一する力を有する。けれども實質
的に言ふならば、正定に於て完成せらるゝ正見は正智(sammāñāna)となり、止觀の觀(Vipassanā)と相通じ正定の
意味を深めるであらう。併し何れにしても正定がその系列に於て重きをなすことは敢て多言を要しない。而して正定の
正 sammā(samyak)は學者の異論あるにも拘らず、予は大四十法經 Mahācattārīśaka sutta(M.N. vol III P.77)
※⁶
等が示す無數の惡不善を生ぜしむる邪なる八道と區別する形容と信する。定即ち三昧(samādhi Tri-Ne-liDsīn)は
※⁷
住心不亂、堅固攝持、寂止一心。と言はれ、其の特質を捉へて心一境相(cittassa ekaggatā)となれる、如く、あらゆ
る禪的修行に伴ひそれを可能にする精神集注の狀態又はその理想を實現すべく勝方便を指すに外ならない。従つて專念集
注を意味する正念(sammāsati)が更に積極的に其の度を増大したものと言くよう。而して正念と内面的に深き關係を持
つ正思惟(sammā-āñikappa)の思惟熟慮が正定によつて、そが眞の作用を可能にする。然らばその正思惟は何に對す
る正思惟であるか。それは即ち正見が示す内容であらねばならない。正見は註釋に從へば四聖諦であるが最初の說法に是を
說かなかつたと考へる予に於ては其の持つ内容を四聖諦とは見ない。他の註釋に記せる邪見は佛陀の根本思想に相應せ
ざるものである限り、正見は世間・出世間の分類は別として諸行無常・諸法無我・一切法苦乃至緣起說等の所謂佛陀の

※¹²

根本思想を指すに外ならないであらう。中に就て諸法無我の思想はニヤナティローカ氏の強調してゐる如く佛教の特質を闡明にする第一義諦である。無我説の目さす處は實踐的には利己に基くあらゆる執着・欲望を滅却し、理論的には從來内に存すると考へられしアートマンに關する學說並びに一切法に實体ありとなす常識的實在論を五蘊・十二處・十八界・緣起・無常・苦等の教説によつて破壊し、更に形而上學的思辨を戲論(*Papañca*)として斥くる歸結上久しく常一主宰として見られたるプラフマン(男性)の教理を否定するに存する。經典に屢散見する三三昧(三解脱門)四三昧・六三昧中に存する空三昧(*suññata samādhi*)は緣起の理による常識的實在論の否定であり、兼ねて無我説の實踐に對する專念・專注を意味する。註釋經には正定の盛る内容を四禪とし、更に四無色定を是に結びつけてゐるが正定の原意は寧ろ三毒の滅即ち涅槃を實現すべく上の如き空を行すること(*suññatāvihāra*)に存するのではないか。

蓋し行空は無我の實踐に向ひ、無我の實踐は佛陀の根本思想即ち正見の完成を意味するからである。かくして三昧は一面欲望を制し邪念を靜め他面是によつて事物の眞相を照觀して無限の生命活動に向ふ。三昧は止(*samatha Shi-gñ-^{-as}*)觀(*vipassanā Lhag-mThoin*)均等を必要とする。^{※₂₀}シヤイデンステュツカーは止を説明して、心の平靜即ち内面的障蓋の滅却によつて得らるゝ精神狀態であるとなし、觀を解釋して深き知見即ち佛陀の根本思想たる三格語及び四聖諦の把持並びに感得であるとなす。蓋し心の障蓋が除却せられて内面的平靜を得るに非ずんば事物に對する確實なる知見は現れない。而してこれらが生起に關する前後はあるにしても決して一面に偏してはならない。何者止の修習は經典が示す如く身心何れも消極的態度を取るが故に是が偏局は精神自體の活動を喪失し、觀の修行は積極的に知見の活用に進

※²²

むが故に是が歪曲は精神の散亂を來すからである。集異門足論は法句經第三七一(Dhammapada No. 372)の偈を引用して、禪を止に慧を觀に配して其の均等を説く。智顥も亦摩訶止觀に於て「大品十八空を明かして般若を釋す、百八三昧禪を釋す。前後兩釋ありと雖も豈禪に般若なく、般若に禪なかる可けんや。特に是は不二にして一にして則ち不二なり」と説いて、自らの立場を確立してゐる。かく止觀を内包する禪定が他の宗教に於ける祈禱と同じく佛教自体の本質を形作る重大なる要素であることは既にベック等の指摘する所である。感覺に基けるあらゆる經驗的知識乃至相對的觀念を斥けてそれに代るに精神自體の純粹直觀即ち覺と名くべき高次の意識に導かんとする所に佛陀の根本關心事が存する。而してかかる宗教的體驗に入る過程としての内觀と反省とが即ち禪定の使命である。正定は既に述べたる如く註釋には恒に四禪を指してゐるが茲に於て、我々は禪の意味する内容並びに定との關係を検討すべき必要に迫られた。

※¹ S.N. vol V p.421. S.B.E XI p.147 雜阿含 第十五卷 大正一〇四頁 Mahāvagga p.10

※² 寺本西藏語文法 改訂版卷尾 宗教研究 新第二卷 第四號 一八頁

※³ 中阿含 第五十六卷 羅摩經 大正七七六以下

※⁴ 長阿含 第八卷 衆集經 大正五二頁 十無學法 正智・正解脫

長阿含 第十卷 三聚經 大正六〇頁 十直道 正解脫・正智

雜阿含 第十七卷 禪思 大正一一一頁 正解脫・正智

※⁵ M,N. vol III p.71 Mahācattārīsaka suttam

Katamo ca, bhikkhave, aryo sammāsaññā saupanīsa sa parikkhāro ? seyyathidaṁ; sammādiṭṭhisammāsati. Yā

kho bikkhave, imēhi sattāgehi cittassa ekaggatā parikkhātā, ayām vuccati, bhikkhave, orīyo sammāsambuddhi saup-
aniso iti pi, saparikkhāro iti pi.

- ※⁶ Har Dayal; The Bodhisattva doctrine in Sanskrit Literature p. 163
- ※⁷ 繆訛卽 緣二十八卷 大正一〇四三頁
- ※⁸ 繆訛卽 釤上卷 大正一〇三三頁
- ※⁹ Karl Seidenstuecker; pāli-Buddhismus XIII Meditation S. 352
- ※¹⁰ M-N. vol III. p. 249 Saccavibhanga sutta 増圓卽 分別聖諦經 大正四六七頁
- ※¹¹ M.N. vol III. p.71
- ※¹² Zwei schrift für Buddhismus V Ueber die buddhistische Meditation S. 132. Keith; Buddhist philosophy p.1 附註
- ※¹³ M.N. vol I. P. 426 Cūla-Mālunkya suttam 增圓卽 緣大十卷 大正一〇四四頁 Oldenberg; Buddha. S. 315
- ※¹⁴ S.N. vol IV p. 360 suññatā 真命經 第二十八卷 大正一三九頁
- ※¹⁵ 繆訛卽 第二十一卷 大正一四九頁 法界次第初門卷中八 大正六八三頁空無脫離
- ※¹⁶ S.N. vol IV p. 362 cha-samādhī Schäidenstuecker's S. 197 S. 353
- ※¹⁷ A.N. vol III p. 25 IV p. 410
- ※¹⁸ S.N. vol IV p. 362 Yo bhikkhave rāggakkhayo dosakkhayo Mohakkhayo idam vuccati bhikkhave asankhatam
- ※¹⁹ M.N. vol III pp10 4—118 Cūla Saññata Suttam mahā Suññata Suttam. 增圓卽 第二十一卷 小別經 大正七三九頁繆
- ※²⁰ 繆訛卽 第十七卷 大正一八頁 A.N. vol I. P. 61
- ※²¹ pāli-Buddhismus S. 345 繆訛出釋 第三卷 二大三藏‘出’繆訛三藏 沙門 S.N. vol IV p. 362 No. 6
- ※²² Dhammasangani P. 232 繆訛足經 第三卷 大正一七五頁 無禪不禪、無知不禪、道從禪智、得性泥洹、
- ※²³ P. 13 Yamhi Jhāna ca Pañha ca sa ve Nibbānasantike.

※25 大正、二二頁

※26 Buddhismus vol II. S57,

11

禪（那） Jhāna (梵 Dhyāna 藏 bSam-gTan) は $\sqrt{dhyā}$ より來り原本的には宗教的な沈思、冥想、專念を意味するけれども是が特定宗教に關係するに到ればその内容は當然その根本的立場によつて規定せられるであらう。禪は一般

に靜慮と譯せらるゝが要するに俗縁を離れて諸の繫縛を斷ち、慮を靜め心を明かにして、真正の理に達すること、又は能く心を専らにして三昧に入り寂靜に遊ぶこととされてゐる。然らば三昧との關係如何。ハイラーの言へる如く三昧は廣く一般的なる概念であるが禪は狭き特殊のそれである。即ち三昧は精神の統一及び冥想の全領域に對する一般名稱であるが禪は意識を沈靜し淨化して行く特殊なる方法又はそれに依つて得られたる狀態をさす。故に三昧は禪を内包する。

三昧は其の深さや強さの程度によつて Pari kamna-Samādhī, upacāra-samādhī appanā-samādhī の三に分類せらるゝが其の最後の三昧は四禪によつて内容附けられるものと言はれてゐる。四禪や後に述ぶる四無色定等の型は佛陀以前若しくはその當時の正統婆羅門以外の修定派の人々が既に行じてゐた所であるが佛陀が是を探つて以て己が組織中に

入るゝ限り彼等とは自ら異なる意味を持つべきである。四禪四無色定等を三界說との關係に於て立ててゐた彼等は物心二元論に依る限り、明かに目的と手段との混同に終つてゐるが佛陀は是を滅に向ふ方法又はその過程に於て心を一境に集注することによつて内を淨化する手段として採用したのである。けれども傳説に從へば佛陀はその成道以前既に久し

く苦行派の中に身を投じてゐたにも拘らず、其の宗教に現はるゝ色調が修定派に傾けることは否み難いであらう。却説その四禪に就て經律（論）中常に一定したる型によつて説かれてゐるが其の註解は *Samantapāṭālikā Vibhanga* に見出し得る、對象に專念することにより欲不善を離れて情意の靜止を得、喜樂を感じるが未だ念（尋）（Vitakka）思（伺）（Vicāra）ともかく如き對象に關する表象が働いてゐる狀態を名けて初禪といふ。更に念思等の不純なる表象の滅による一心の一相（Cetaso ekotibhāvam）を得、喜（piti）樂（sukha）を感じる狀態を名づけて二禪と稱する。茲に於て知の散亂は全く止息し、益精神の純化を得て所謂奢摩多に入る。尙残存せる喜の情すら茲に除かれて、内心は捨（upekkhā）と呼ばる、如き平靜そのものゝ狀態に進むや、正しき憶念護持を意味する正念、正しき決定識別を意味する正知を得て身によつて樂を感受する狀態を第三禪と名づく。更に苦樂を捨離し煩惱を超越し、心は完全なる奢摩多の狀態に住し、内面の純化が觀智の發動を促す消息を名づけて第四禪となす。上の四禪は心一境相に住して、初禪には五蓋の如き諸欲は除かれてゐるが（paṭhamena jhānenā nivaraṇām）念思喜樂存し、二禪には念思除かれ（dutiyyena jhānenā vitakka vicārānaṁ）三禪には喜が滅せられ（tatiyena jhānenā pītiyā）四禪には苦樂等を棄去して（catutthena jhānenā sukhadukkhānaṁ）精神の純粹性を得る。かくして正定の完成は正智となり、正解脱となり若しくは正解脱を得て正智の發現を見るのである。蓋し正見は正定に於て無明を滅却してそれ自身を完成するからである。然るに阿含には屢々の四禪に續いて四無色定や想受滅定（滅盡定）が存する。四無色定中後の二定は佛陀が其の修行時代に訪れた二位駁や Alara-kālāma, Uddaka-Rāmaputta の修せるものと傳へられるが是等四定が果して四禪と必然的關係を

※⁷※⁵※⁶

有するものであるか、従つて又滅に向ふ重要な道であるか否かは尙疑ふの餘地が存すると思はれる。恐らくそれらの

※⁸

二つは佛教内に於ても各系統を異にして傳へられ後に到つて連結されたものではないかと想像せらる。然らばその所謂四無色定とは何であるか。」は禪定的修練が更に進んで、あらゆる物質的繫縛を脱したる境界を四分したものである。

※⁹

其の一なる空無邊處定(*ākāsānañcāyatana s.*)は一切の色想を離れ有對の想を脱し、あらゆる作意を滅して無邊の空間領域を念し、その二なる識無邊處定(*vिन्मानान्तर्यायातना स.*)は一切空無邊處を度して意識の無邊なる領域を念じ、其の三なる無所有處定(*ākinicānāyātana s.*)は一切識無邊處を度して、無所有の領域を觀じ、其の四なる非想非々想定(*n-evasaññānāsaññāyātana s.*)は一切無所有處を度して、意識なるに非ず、無意識なるに非ざる領域に進む定である。

※¹⁰

是等は一切色法の繫縛を脱して空を行する觀法を深化せしめた方法である。従つて表面上より見る限り奢摩多に重きを

※¹¹

置いたものである。以上の八を總稱して八等止(*Samāpattiya*)とも更に想受滅定(*Sañnavadīyanirodha s.*)を加

べて九次第定(*Navānupubbavihāra s.*)と呼ぶ。想受滅定は滅盡定とも稱し、感覺や知覺意識を全く滅したる定である
※¹²

けれども色界第四禪によつて心想起らずとなす無想定とは全く異なる定である。八等至は三界説に關係を持つ外學派に其の起源を有するが故に佛教に於ては特に想受滅定なる一定を加上したものと思はる。従つて多少不自然なる色調の存することは蓋し免れないとあらう。けれども以上の九次第定が佛教の思想体系に於て位置を有する限りは佛教それ自身の理想や立場によつて規定し獨自の意味を持たしめなければならぬであらう。思ふに佛教の禪定は宗教心理に基いて純化への意識發展(*tato amutra tato amutra anupubbena saññaggañ phusati*)に伴ふ精神内容の如何を示すものであ

る。最下の意識自體は物理的な肉體と結合してゐるものであるがそは内觀の力によつて漸次進展して遂に肉體的制約を全く離脱する。斯くして精神は益純粹なる働きをなすに到る。是所謂最高の直觀であり、覺せしものである。

凡そ我々の宗教意識發展の階位に於てはそが一定の狀態に於てのみ價値あるもので次の階位に於ては解消せられて行く。漸次意識の内面へと進み行けば是によつて外的條件が除かれて最後に最高なる意識自體の最も内面的なる光に照らされてあらゆる矛盾が解決せらるゝのである。佛教に於ては是を自覺と名づく。自覺は認識ではない。生きた切なる体験である。従つてこれが外學派のそれと異なる處は依然として正見即ち佛陀の根本思想によつて支配せらるゝ意識内容の事實である。故に只八等至乃至九次第定の形式のみでは何等意味を持たない。只佛教の理想實現の方法としてのみ意味を持つ。固よりこれらは精神内部の問題なるが故に體驗によらずんば猥りに憶測することは出來ないけれども萬人が悉くこの軌道に従つて行くべきであるとは斷定し得ないであらう。けれどもこれを創めたる者自身に於ては自己の深き内的經驗を基として、修行人を教ゆる立場に立つて提唱したものと考へられる。只その格式に泥むことは却つて修行を形式化し精神自體の激渾たる自由活動を失はしめるであらう。

※一 Har Dayal; the Bodhisattva doctrine p.221

Bodhisattva bhūmi—Citta—Aikāryayau Citta-sthitih (Concentration and stability or fixity of the mind)

mrs. Rhys Davids, Gotama the man P78

the Practice of rapt musing or abstraction

※二 Die Buddhistische Versenkung S.15

- ※³ Z,F.B. V, S.134 Ueber die Buddhistische Meditation
- ※⁴ 守井博士 印度哲學研究 (新川巻) 1回 D.N. vol I p.36
Brahmajāla sutta - Dīṭṭha dhamma - nibbāna - vādā 瞬眞句 第十四卷 梵動經 大正九三回
Samantapāśadikā P.141
- ※⁵ Vibhanga p.244 Puggala-Paññatti p.59
p.257. yo takko vitakko sankappo appanī vyappanā cetaso abhinoropanā sammīsankappo; ayañ vuocati vitakko.
yo cāro vicāro anuvicāro upavicāro cittassa anusandhanatā anupekkhanatā; ayañ vuocati vicāro.
- 長井博士 根本佛典の研究 117 | 開
- ※⁷ M.N. vol I p.164 Ariyapariyesana sutta.
- ※⁸ A.N. vol IV p.410 XXXII
- ※⁹ Beckh; Buddhismus II S.48 Vibhanga p.262.
法蘿足緒 第八卷 大正四八八頁
- ※¹⁰ P.E. Dictionary - Cessation of consciousness and sensation
摩訶止觀 第三卷上 大正1111回
- ※¹¹ 俱舍論 第五卷國譯大藏經譯語 第十一卷 1110回
忽滑谷博士禪學思想史上卷 100頁
- 安藏造唯識三十頃釋論卷十長頃釋參照
- ※¹² D.N. vol I. p.184 potthapāda Sutta
- ※¹³ Paul Gese; Einleitung in die Religionsphilosophie ueber die verschiedenen Standpunkte und Methode zur Erforschung des Wesens der Religion S.15 附註

今や予は八等至の各階位に於ける修行の實果に應じて出生すべき天界の場所に關する論述を試る機會を得た。これは其の起原を外學派に持つ輪廻説と三界説とに關係して佛教の宇宙觀の一部を構成するものとなつたのである。^{※1} 初禪を修したるものは梵身天(Brahmakāyikā deva)〔梵界の梵衆天・梵輔天・大梵天の總稱〕、二禪は光普天(Ābhādeva)、三禪は徧淨天(subhakinnā deva)^{※2}、四禪は廣果天(Vehapphalā deva)に生れ更に四禪各によつて總て淨居天(Suddhāvasa-deva)〔無煩天・無熱天・善現天・善見天・色究竟天〕に生れ無想定によつて無想有情天(asaññasattā deva)……Neumann-die Goetterunbewusst im Wesen)^{※3} に四無色定によつてはそれに對應する名稱の天に出生し得るとせらる初禪の修行者が生れるといふ梵身天は本來の意味よりせば梵天所屬の諸天であるけれどもそれが是等の住む世界に轉化せられたものと考へらる。而して梵天(Brahmā)は正統婆羅門に於ては世界の自在主・創造者・化生者・最高の能生者である。そして婆羅門の理想とする處は梵天との一致俱住(Brabmasahavyātā)^{※4} である。時を経るに従ひ、この理想に達することは禪定に入れる場合にのみ可能とせらるゝに到つたのである。けれどもそれとの一致俱住が單に修定の期間のみならず、永久でありたゞと希求するには是を死後に置かねばならないから、この禪定を修したるものは梵界に生れるとしたのである。併し正統婆羅門に於て梵天は最高であるにも拘らず、是が初禪に存することはこの禪定階段の組織が正統婆羅門以外の修定派によつて作り出されたものであるといふ理由の一つになるであらう。然らば梵身天以下は

四天王天(Cātumahārājika d.)三十三天(Jāvātimsā)夜摩天(Vāmā d.)都史多天(Tusitā d.)樂變化天(Nimmanarati)他化自在天(paranimittavasavatti d.)の如く諸天の名を一つも省略してゐないがそれ以上の天界に於ては上に述べたやうに飛び飛びに舉ぐる理由如何、その理由を示すものは容易に見出し難いが恐らく特に出色のものを代表的に擧げたのであらうと思はる。次に四無色定によつて四無色天に生れるとなす限り、この四は三界説の無色界(arūpadhātu)に當り、其の他の文献に依れば他化自在天以下地獄までを欲界(Kāma dhātu)に當つるが故に梵身天より色究竟天までは色界(rūpa dhātu)に相當しなくてはならない。而してこれを四禪に配當して上の如くしたのである。これらの起原が佛教以外の修定派に存するが故に佛教化したとはしく、尙充分に整合せざる痕跡が残されてゐる。思ふに佛陀は異教徒中より入團したるものに對しても極めて寛大であつて直ちにその先入見又は信仰を排撃することなく、漸次佛教的に改めさせしめたのである。梵天を信じそれとの一致俱住を理想とする者に取つては最高神としての内容的方面に關係せず、その道は慈悲喜捨の四無量心(cattassa appamaññaya)を修するにありとするが如き是である。この四無量心も其の起原は婆羅門に存すると考へらるゝがそれが實踐は佛教に於ても重要なが故に採用したのであらう。異例としては四禪にも配當するに到り、慈(mettā)によつて梵身天に悲(karuṇā)によつて光音天に喜(muditā)によつて徧淨天に捨(Upekhā)によつて廣果天に又四つの各によつて淨居天に生ずるとなす說も存する。併し四梵住(brahnavihāra)は普通梵天に到る道であつて初禪への修行法とせられてゐる。斯くの如く原始經典には梵天を初として諸天の存在を信じてゐるかのやうに說かれてゐるがそれは只譬喻的に用ひられたに過ぎない。蓋し三明經(Tevija sutta)等には佛陀自身の

諸天に對する態度が示されてゐる所より見ても明かであるからである。佛陀の目的とする所は死後梵界又はそれ以上の世界に生ずることではない。佛陀は死後にまで行き過ぎたる理想を現世に引戻して現實に於てそれが證得を力説したのである。而して其の選ばれたる只一の道は八正道の体験である。中に就て正定は心一境相と言はるゝ如く專念集注の積極的働きである。只宗教意識の發展してゆく過程を示すに當時の修定派がものしたる形式（特に四禪）を採用し、これを宗教の根本的立場に照して變意したるに外ならない。併し佛滅後稍時を経るや常識的實在論者はこれを事實と信するようになり佛教自身の立場に稍狂ひを生ずるに到つたのである。けれどもそれは佛教として止むを得ざる心理過程なるが故に強ち悪いといふのではない。蓋し最初は存したらよいといふ欲求が次には存在すべきであるといふ要請となり、最後には存在するといふ實在の信仰となるからである。けれども根本佛教に於ける禪定は飽く迄も涅槃を證得する方法であつて、天に生るゝことを理想とするものではない。

更に禪定を修することに依つて、神通を引發するの説が原始經典の處々に散見するが、これに就て一言するの要がある。巴利沙門果經(D. N. vol I. P. 79)には「若し心三昧によりて清淨となり不純乃至世間の苦より脱し、柔和善順堅固不動となるや、心を神通の爲作に赴かしむ」と記す如く、三昧によつて超自然的力を得ると考へられてゐる。然らば神通の原意は如何、六神通と三神變との分類は配合の如何によるものであらうがイツ・ディ iddhi 本來の意味は力(power, Macht)又は力ある狀態を指すに外ならない。思ふにこは禪定によつて得たる内面生活の自由を具體的に表現したものに過ぎない。その自由なる力に重きを置いて超自然的力となしたのであらう。今六神通を見るに初の五通の如き

※¹²※¹³

は其の起原を外學派に持つものであつて、佛陀の根本的立場と相容れざるものである。佛陀自身がその或るものと排撃

※¹³

※¹⁴

した文献さく存する程である。只第六の漏盡通(āsavakkhayakaraññāna)のみは三神變中の教誠神變(教訓示現)(an-

usasa-nipātiḥāriya)と共に佛陀の思想的立場に契合するものである。かくせば滅に向ふ道たる禪定の本意と一致する

故に禪定によつて、超自然力を引發するといふ說は佛教に於て正しからざるものであると斷すべきである。ハイラー

※¹⁵

※¹⁶ リスデビツヅ夫人の如きは禪定を基督教の神秘說乃至古代希臘のそれに比較してゐる。けれども禪定は我執我欲を制止し如實智見によつて宇宙人生を靜觀し、自己本然の活動をなさんとする基礎であつて、普通人々の言ふが如き神秘的な

る忘我の狀態又は恍惚のそれに入るものは大いに異なるものである。經驗的知識に對しては神祕の如く考へられるかも知れないがそれ自身決して神祕ではない。況んや基督教のそれらとは其の根本的立場を異にする限り到底これらを比較することが出來ない。ペックは又「佛教は全くヨーガに外ならない」といふけれども我々は寧ろ瑜伽派が佛教の影響を受けたと見なければならぬ。瑜伽的修行は嚮に言へる如く、佛陀以前に存し佛教がその形式を採用したことはある

けれども瑜伽派としての成立は歴史的に言へば著しく後に屬するものである。しかも瑜伽派がイーシュワラ Iṣvara を立て瑜伽による超自然力を説くが如きは佛教の根本思想とは全く相容れないものである。

※¹ A.N. vol II. pp. 126—3

※² A.N. vol I. p.267

※³ D.N. vol I.p.18Brahmajāla sutta

Aham asmi Brahmā māha—brahmā abhībhū antabhi bhuto aññathu—daso vasavatti issaro kattā nimmātā settho

sanjītā vasi pītā bhūta - bhavyānam

※⁴ D.N. vol I p.235 Tevijja sutta Rhys Davids; Dialogue of the Buddha vol I p.301 Brahma-sahavyātā—a state of union with Brahma

※⁵ Dharmasaṅgani pp223 224 vibhāiga p.421. katame dhamma rūpāvacarī⁹

※⁶ A.N. vol II. pp128—130

※⁷ A.N. vol III. p.15 Dayal; the Bodhisattva doctrine p.226 Scheidenstuecker; pāli-Buddhismus S.353

※⁸ D.N. vol II. p.245

※⁹ 衛藏氏 大藏經難座 大乘起信論講義 11回7頁

※¹⁰ 增一阿含 第五十卷 大愛道般涅槃品 大正六八二三一頁

※¹¹ A.N. vol III. p.280

※¹² A.N. vol I.p.170 世間の 第三十五卷 大正六五〇四頁

※¹³ D,N. vol I. pp. 213—214 kevaldha sutta

※¹⁴ A.N. vol III. p.281

Asavānañ khaya anāsavam ceto vinuttin pañña vinuttīñ dīṭṭh' eva dhamme sayam abhiññā saachikatvā upasam-pajja viharati.

※¹⁵ Heiler; Die buddhistische Versenkung S.51

※¹⁶ Mrs. Rhys. Davids; Buddhist Psychology p.1141 參照

※¹⁷ 得龍博士 翻譯佛敎哲學論文集 1157頁 石原博士 ハラタケルトニ於ける「だまし」の教

※¹⁸ Beckh, Buddhismus II. S.11 Der ganze Buddhismus ist durch und durch nichts als yoga

※¹⁹ 宇井博士 日藏和學史 1回11頁 木村博士 日藏哲學佛教思想史 11回9頁

四

其他禪觀に關するものは後に至るに隨ひ、益繁雜を極めて居るが要は心を一境に專注することによつて、解脱に到る方法又はその方法を補ふ使命を果すに外ならない。四無量・四念處・八解脫・八勝處・十徧處・十念等はその主なるものである。四無量は嚮に述べたる如く、慈悲・喜捨の修習であつて、要するに三毒を離れ無量の利他行を施し、遂に一切の相對を超越する心境に到る禪觀の一形式である。梵堂又は梵住の名によつて知らるゝ如く本來は梵天に至る方法であるが佛教的に其の意味を改變して、清淨なる心の所住となす。^{※1} 四念處(Catārā sati pattihaṇa)は古來一乘道(唯一趣向道)^{※2} 又は自燈明・自歸依・法燈明・法歸依の内容とせらるゝものであつて、身(kāya)受(Vedana)心(citta)法(dhamma)を對象とする禪觀の一形式である。阿含にも註釋が存する位であるから其の起原は相當に古いものである。後には一切法を攝すとせられ更に身は不淨・受は苦・心は無常・法は無我と觀する別相念處及び境觀俱總の所謂總相念處も作り出されるようになつたのである。^{※3} 八脫脫(aṭṭhavimokhā)は(一)(内)有色觀諸色(二)内無色想觀外諸色(三)淨解脫身作證(四)空無邊處(五)識無邊處(六)無所有處(七)非想非々想處(八)受想滅身作證である。こは煩惱を斷盡し解脫する爲の勝方便としての禪觀である。故に婆娑にはこれを八背捨といふ。蓋し初二解脫は色貪心を棄背し、第三解脫は不淨の念を棄背し、四無色處解脫は各次下地の心を棄背し、想受滅解脫は一切有所縁心を棄捨するからである。中に就て第三と第八とに身作證を附するは二界中各邊に存し俱に勝れてゐることを證する。この形式の起原は梵動^{※4}

經に存する非有想非無想論に求め得るであらう。八勝處 (*attha abhibhāyatānāi*) は（一）内有三色想觀外色多、以下同上（二）内無三色想觀外色少、以下同上（四）内無三色想觀外色多、以下同上（五）青勝處（六）黃勝處（七）赤勝處（八）白勝處であつて、初二勝處は初禪、次二勝處は二禪後四勝處は四禪に配當せらる。第三禪は既に述べたる如く樂に住する (*sukhavihari*) が故に觀智鈍劣、爲に勝處を立てない。八勝處は所觀の色に於て欲貪を斷する方如であるから八解脱を深化せしめたものとも考へらる。蓋し勝處とは所緣の境乃至諸の煩惱に勝つ *neberwinden* 觀法の謂である。この起原も亦八解脱と同處に求むべきであらう。十徧處 (*dusakasina-yatanāni*) は（一）青徧一切處定（二）黃徧一切處定（三）赤徧一切處定（四）白徧一切處定（五）地徧一切處定（六）水徧一切處定（七）火徧一切處定（八）風徧一切處定（九）空徧一切處定（一〇）識徧一切處定であつて、初八徧處は第四禪第九第十の兩徧處は四無色定中の初二定に配當せらる。こは八勝處の觀智が更に熟したるものと考へられる。而してその主とする處は一切の煩惱を遠離し精神の純化を期すべく、青・黃・赤・白・地・水・火・風・空・識の十對象に無邊無二の觀法をなすに存する。かく無間廣大の勝解作意なるが故に徧處といふ。この起原も亦外學派の非有想非無想論に求むべきであらう。八解脱中の淨解脱、八勝處中の後四勝處、十徧處中の前四徧處は同一内容の禪觀であるが、總取・別取・無邊行相等方法上に差異を有する。大智度論第二十一卷には以上の三を觀智に於ける程度の差となし八解脱を初行八勝處を中行十徧處を久行となすがこは後世の組織によるものであつて其の初は各獨立に存したものと思惟せらる。更に十念 (*daśānuṣati tthānāni*) として（一）念佛（二）念法（三）念僧（衆）（四）念戒（五）念施（六）^{※11}

^{※15}^{※13}^{※14}^{※12}

念天（七）念休息（八）念安般（九）念身（非常）（一〇）念死が存する。六念八念等の文献も見出し得るが、次第に加上して十念となしたものであらうと思はる。何れにしてもその主とする所は恐怖や亂想を對治して三昧に入るにあるが其の方法として右十種を專心に憶念するのである。併し禪觀の立場よりいへば後の四念がより適切であると考へらる。

念休息(*upasamānussati*)は奢摩多の專心であり、念安般(*ānāpānasati*)は數息觀であり、念身(*kāyagatāsati*)念死(*mā-
aranasati*)は不淨觀に攝せられる。
※¹⁵

就中數息觀と不淨觀とは後¹⁵、二甘露門として禪定中重きをな

すに到つた。安般とは安那般那(*ānapana*)であつて入息(*āna*)出息(*apāna*)をいふ。行者は先づ正身端坐し、出入の息を數へて一より十に及び是を反復しつゝ遂に散亂の心を對治する。四念處中の身念處に於て先づこれを行ふとは念處經の我等に告ぐるところである。不淨觀は又身念處の主要なる題目であつて三十二分身(*dvattīnisaṅkāra*)の不淨屍骸の推移に關する九相(*nava sīvathi kaya*)等を念想して貪愛の心を離れんとする方法である。八解脫の初二、八勝處の初三等は同じく不淨觀に外ならない。其の他無常想、苦想、無我想、食不淨想一切世間不可樂想、死想不淨想、斷想離欲想盡想の十想が存する。これも要するに三毒を滅じ心を止觀に赴かしむる勝方便に外ならない。かくの如く原始佛教の修行徳目にして禪觀に關係せざるものは殆んど存せざる程多きに及んでゐる。而して其の二三を除いては殆んど起原を外學派に持つてゐるといつてよいであらう。けれども是等を佛教に採用したる以上は佛教自體の根本思想によつて規定しなければならない。即ちこれらは佛教の理想たる涅槃を現實する方法として深き意味を持つ。然るに道元禪師は所謂坐禪は習禪に非ず。唯是安樂之法門なり。菩提を究盡するの修證なり。といつて正傳せる坐禪の本質を提示せらる。原始佛

※¹⁸

※¹⁹

※²⁰

教の禪定と禪師のそれとの間に一見存すると思はるゝ矛盾を如何に解除するかの道は予の大いに言はんとする所であるが今は只原始佛教のみに留めて擋筆したとと思ふ。世はんとして觸れざりし事項又甚だ多し。それに就ての論及は更に次の機會を俟つこととする。

- ※¹ A.N. vol III p.128. P.184 Vibhanga p.277 集異門足論 第六卷
Visuddhi-magga vol I. p.235—
 - 大正三十九頁 法蘊足論 第七卷 大正四八五頁 偕舍論 第二十九卷 大正四七五頁
 - ※² M.N. vol IV p.457 中阿含 第三十四卷 念處經 大正五八二頁 vibhauga p.19;
 - ※³ 雜阿含 第十九卷 三十一 大正一三九頁 中阿含 念處經 大正五八一頁
ekayāna magga eka+āyana+magga, eka+yāna+magga
 - ※⁴ D.N. vol II. Mahāparinibbāna suttanta p.100 長阿含 第二卷 游行經 大正一五頁 思想第六十號 一四九頁
 - ※⁵ M.N. vol I. sati patthana suttam p.57
 - ※⁶ 偕舍論 第三十一卷 大正一一八頁
 - ※⁷ A.N. vol IV p.303 D.N. vol II mahānidāna sutta pp 70—71
 - 中阿含 第三十四卷 大因經 大正五七頁 集異門足論 第十八卷 大正四四三頁 偕舍論 第二十九卷 大正一五一頁
 - ※⁸ 大毘婆娑論 第八十四卷 大正四三四頁 大智度論 第三十一卷 大正一一五頁
 - ※⁹ 偕舍論 第三十九卷 大正一五一頁 D.N. vol III. Sangiti—sutta p.262 一二に身作證の文字な。
 - ※¹⁰ D.N. vol I. P.33
 - ※¹¹ A.N. vol IV p.305. D.N. vol II.mahāparinibbāna suttanta p.110 D.N. vol III. sangiti—suttanta p.26 集異門足論
- 第十九卷 大正四四五頁 偕舍論 第三十九卷 大正一五一頁

※12 A.N. vol V p.46 M.N. vol II. mahāsakululāyi suttam p.14
D.N. vol III. sangīti - suttanta p.268

中阿含 第六十卷 大正八〇五頁 集異門足論 第十九卷 大正四四七頁

俱舍論 第二十九卷 大正一五一頁 Dhammasangani pp.41—42

巴利文ニ拠(pathavi)水(apo 火(tejo)風(vayo)等編處を先とす。茲に舉ぐるは婆婆第八十五卷大正四四〇頁に依る

※13 大毘婆沙論 第八十五卷 大正四四〇頁

※14 大智度論

※15 A.N. vol I p.42 後の四念の順序は七念安般(ānapānasati)八念死(maranasati)九念身非常(kāyagatāsat)十念休息(upasa
mānusati)

增一阿含 第一卷條二卷 大正五五二頁 大正五五四頁 第二卷ニ拠三念僧(sanghānussati)の聖衆の内容を四雙八輩
(cattāri purisayugāni athapurisapuggala)四・visuddhi magga vol I. P196—

A.N. vol III. p.284

※16 大智度論 第二十一卷 大正一一八頁

Schleidestecker, pāli Buddhismus S.354

※17 U.N. vol II. Mahāsatipathāna suttanta p.291

M.N. vol I. sati pathāna suttam p.56

Kesi, lōnī, nakhī, dantī, taco, saṁsaṁ, nahīru, arṭhi, arṭhimūjā, vākkañ halayañ, yakacan, kilomakan, pilakam,
papphīsañ, antañ, aitañ, aitañ, udarayañ, pittan, semhañ, pubbo lohitariñ, sedo, medo, assu, vasakhe lo siṅghāñikā, las-
ikā muttañ, matthake matthalungam

中阿含 第二十九卷 俗經 大正五五六頁 M.N. vol III. kāyazatāsatī suttam p.90

※18 M.N. vol I. satipathāna suttam p.53 大智度論 第二十一卷 大正一一一七頁

※19 大智度論 第二十三卷 大正一一一九頁

*20 三十七道品 Schleidenstuecker S.355

*21 普勸坐禪儀 正法眼藏辨道話參照

【附記】本論文を書き終つて約一ヶ月後、たまゝ日本佛教學協會年報（第四年）を手にし、卷頭寺本婉雅教授の論文を興味深く讀むを得た。併しその内容に關しては予の見解と少なからざる徑庭の存するを見た。即ち（一）滅盡定並びにその解釋法（二）定と禪とに關する意義の相違。特に禪を「自我を基調とする瑜伽思想の苦行主義となす点（三）佛陀を絕對無神論者となす根據の解釋（四）四禪四無色定を正統婆羅門の所說となす點（五）奢摩多と毘鉢舍那とを十二因縁又は成道經過とに關係せしめての解釋法、更に毘鉢舍那を八正道の正見となす見解（六）佛陀が五比丘に先づ四聖諦を説いたとなす見解（七）智慧到彼岸の意義（八）忽然念起の無明妄想の解釋（九）根本佛教の念佛と淨土教の念佛との意義（10）upadhi の解釋（11）菩提樹下に於ける心的過程の形而上の直觀世界の意味（12）八正道は滅に向ふ道か滅の結果かの問題又その重點の置き方（13）pacceka-buddha を paticca-samuppada と關係せしむる解釋。

等に關して予は多くの疑問と異見とを持つてゐる。これに就て予の見解の發表は他日を期せざるを得ないがその根本的立場は本論文でも多少論述してあるから今は只附記に止めて置く。